

# 離島留学制度を持つ高校を対象とした離島のまちづくりにおける高校生の役割に関する研究

北村知聖\*・安武敦子\*\*

A study on the role of high school students in area management on remote islands targeting high schools with study abroad system on remote islands

by

Chisato KITAMURA\*・Atsuko YASUTAKE\*\*

Many schools on remote islands are closed due to the declining birthrate and aging population. However, the continuation of the school is necessary for regional revitalization. Therefore, a remote island study abroad system was established. Since Nagasaki Prefecture is an advanced region in the remote island study abroad system for high school students, the value of high school students in remote island areas was examined for high schools in Nagasaki Prefecture. As a result, it was found that high school students can contribute to the local community by providing opportunities to think about local issues in club activities and classes. On the other hand, in order to promote study abroad on remote islands, it was found that high school values and mental support for international students are also necessary.

**Key words:** Remote island, Study on a remote island, High school, Regional activation

## 1. はじめに

### 1.1 研究背景と目的

現在日本では、少子高齢化が著しく、社会問題となっているが、特に離島は人口減少が著しく、超高齢化が問題となっている。そのため、離島地域を有する地方公共団体等の要望の高まりを背景に、産業基盤や生活環境の整備が他の地域と比較して低位にある状況を改善し、離島の地理的及び自然的特性を生かした振興を図るため、離島の自立的発展を促進し、島民の生活の安定及び福祉の向上を目的として、離島振興法が制定された。これにより、本土と離島を繋ぐ定期便が増えたり、運賃の引き下げが行われたりしたことにより、本土と連携しやすくなった一方、生活利便施設や学校、

企業が充実している本土に出て行く人が多く、若年層を中心に人口が減少しているのが現状である。その結果、2016年度には484校中44校が5年間で廃校となっている。廃校を防ぐには生徒数を増やす必要があり、その方策として国内では初めに小中学校の離島留学が実施され、その後高校に拡大した。長崎県は2003年に離島留学制度初の高校生受け入れを行い現在も継続している。

本稿では長崎県の高校離島留学制度を持つ高校5校を対象として、離島における高校生の役割を明らかにする (Fig.1, Table1)。高校生は小中学生と比較して部活動や学校行事を通して主体的な活動ができるため、離島における高校生の地域活動が離島の課題である若

令和4年12月19日受理

\* 工学研究科 (Graduate School of Engineering)

\*\* システム科学部門 (Division of System Science)

年層の担い手不足に貢献できるか考察する。

## 1.2 研究方法

長崎県ホームページより、長崎県立壱岐高等学校、長崎県立対馬高等学校、長崎県立五島高等学校、長崎県立五島南高等学校、長崎県立奈留高等学校の活動内容を、長崎県教育委員会に請求した資料から各高校の留学生の出身地内訳と生徒数推移を把握する。また、各高校へのアンケート及び教頭先生や部活の顧問の先生へのヒアリングから各高校の実態及び生徒の生活形態や満足度、課題点を分析する。アンケートは、2020年8月、9月に長崎県で離島留学制度を実施している5校各コースの生徒に行った。回収率は、壱岐高等学校東アジア歴史・中国語コースが37人中33人の89.2%、対馬高等学校国際文化交流科が77人中64人の83.1%、五島高等学校スポーツコースが48人中41人の85.4%、五島南高等学校夢トライコース26人中26人の100%、奈留高等学校普通科が33人中25人の75.8%であった。

## 2. 長崎県の離島の概要

長崎県には有人等が51島あり、その内離島留学を実施している4島が属する3市を見ると、壱岐市の人口は、1985年は39,528人であったが、2005年には31,314人と20年間で8,114人減少している。また、2000年は33,538人であったが、2020年には24,948人と20年間で8,590人減少しており、1985年から2005年の20年間と比較すると、ほぼ一様に減少している。社会増減<sup>注1)</sup>は、2005年に-253人と転出超過であり、2010年も-268人と転出超過であるが、その後は2015年に-225人、2020年に-173人と転出超過が続いているがやや改善している。

対馬市の人口は、1985年は48,875人であったが、2005年には38,481人と20年間で10,394人減少している。また、2000年は41,230人であったが、2020年には28,502人と20年間で12,728人減少しており、1985年から2005年の20年間と比較すると、減少が加速し

ている。社会増減は、2005年に-616人、2010年に-433人、2015年に-259人、2020年に-383人と転出超過が続いているが、改善傾向にある。

五島市の人口は、1960年が最も多く38,860人であったが、2015年には23,264人にまで減少している。社会増減は、2005年は-708人、2007年は-712人と転出者が転入者の数大きく上回っている。しかし、2007年から2013年にかけて転入者と転出者の差は縮まり、-712人から-183人となっている。2014年に一時的に-363人となるがその後も再び改善し、2019年には+33人となり、近年で初めて転入者数が転出者数を上回っている。ただし、社会増減が改善している要因として、少子高齢化により島外に出て行く若年層の人口が減少していることを考慮する必要がある。

## 3. 高校離島留学制度の実態

### 3.1 日本国内における高校離島留学制度の実態

全国で高校離島留学を実施しているのは、北海道の3校、東京都の2校、島根県の3校、広島県の1校、愛媛県の2校、長崎県の5校、鹿児島県の2校である



Fig. 1 長崎県の離島及び離島留学制度を持つ高校の位置

Table 1 長崎県の離島留学制度を持つ高校の概要

学校名	離島留学開始年度	設立目的
長崎県立壱岐高等学校	2003年	東アジア歴史・中国語コースでは、大陸との交流の歴史や考古学、中国語や中国文化を専門的に学び、国際的に活躍できる人材を育てることを目的として設立された。
長崎県立対馬高等学校	2003年	国際文化交流科は、韓国の言葉や歴史、文化について専門的に学び、韓国の人々との交流を通して異文化を理解し、国際社会に貢献できる人材を育てることを目的として設立された。
長崎県立五島高等学校	2003年	スポーツコースは、陸上、柔道、剣道の技能を伸ばして競技者として活躍し、スポーツ全般に携わる人材を育てることを目的として設立された。
長崎県立五島南高等学校	2018年	夢トライコースは、農業や漁業などの体験や地域の祭り、行事など、のびのびと活動し学ぶことができる環境で、社会性や生きる力を育てることを目的として設立された。
長崎県立奈留高等学校	2018年	E-アイランド・スクールは、少人数ならではの手厚い指導で世界に通用する英語のコミュニケーション能力を持つ人材を育てることを目的として設立された。

(Fig.2) 注2)。長崎県が最も多く、その内3校は高校生の受け入れも全国で初めて実施しており、2003年から約19年間継続されているため、長崎県は高校離島留学の先進地であるといえる。

また、留学生の生活タイプは里親タイプ、孫戻しタイプ、親子タイプ、寮生活の4つである。里親タイプは、留学先の島の里親の下で生活し、里親への委託料やホームステイ費補助金制度がある。孫もどしタイプは、留学先の島内在住の祖父母や親戚の家で生活し、ホームステイ費補助金がある。親子タイプは、留学先の島に親子で移住する形式で、孫戻しタイプ同様に、ホームステイ費補助金がある。

### 3.2 長崎県における高校離島留学の実態

#### 3.2.1 壱岐高等学校の実態

##### 3.2.1.1 壱岐高等学校の生徒数推移

2003年から離島留学制度として東アジア・中国語コースを設立し、初年度の生徒数は壱岐島内出身が5人、島外出身が3人の合計8人であった。その後やや増減をし、2019年の57人が最大となっている(Fig.3)。出身地別に見ると、島内出身の生徒が最も多かったのは、2019年の26人であり、最も少ないのは2013年、2014年の2人である。一方、島外出身の生徒は2003年の3人が最も少なく、その後増加傾向にあり、2020年の31人が最も多い。以上より、東アジア・中国語コースは、年々島外出身の生徒が増えており、全体としても増加傾向にあると言える。また、壱岐島外からの留学生の出身地内訳を見ると、壱岐高校の2003年の県外からの入学者は福岡県2人であり、2019年に福岡県6人、東京都1人、神奈川県2人、栃木県1人、滋賀県1人、鹿児島県1人の合計12人となっている。2022年に合計7人と減少しているが、2003年から2022年の19年間全体としては増加傾向にあると言える。

また、東アジア歴史・中国語コースに入学した理由として最も多く挙げられたのは、「早く中国語を学びたい」の14人42.4%であった。次いで「東アジアの歴史を専門的に学びたい」が5人15.2%であり、東アジア歴史・中国語コースのカリキュラムに魅力を感じている生徒が多いことが分かった。

##### 3.2.1.2 壱岐高等学校の活動

東アジア歴史・中国語コースは、中国語を専門的に学ぶコースと歴史を専門的に学ぶコースに分かれている。中国語を学ぶコースでは、県内外のスピーチコンテストに出場し受賞している。また、7月から8月には約15日間上海外国語大学で研修を行い、語学力の向上を図っている。歴史を学ぶコースでは、古代米作り体験や歴史学巡検を通して地域の歴史について学ぶ

だけでなく、歴史論文の全国コンクールに出場し受賞している。

地域活動としてヒューマンハートという部活動があり、壱岐市の取り組み「壱岐なみらいプロジェクト」の一環として2017年から壱岐市が主体となって高校生による探求活動を開始し、2020年からはその活動が壱岐高校内での実施となった。壱岐の地域活性化を目的として2020年に発足した。イノベーション活動のプロ企業であるi.clubと壱岐市SDGs先進活動の先導役である壱岐みらい創りサイトと連携しながら活動を行っている。活動は、放課後週1回で、2020年には27名、2021年には20名が入部し、多数が兼部している。高校生が自ら壱岐の課題について考え、壱岐市の観光プランの提案や食品ロス改善のための製品づくりに携わる等、地域と連携しながら実際に行動を起こし検証している。

#### 3.2.2 対馬高等学校の実態

##### 3.2.2.1 対馬高等学校の生徒数推移

2003年から離島留学制度として国際文化交流科を設立し、初年度の生徒数は対馬島内出身が12人、島外出身が11人の合計23人であった。その後やや増減をし、2021年の85人が最大となっている(Fig.4)。出身地別に見ると、島内出身の生徒が最も多かったのは、2005年の35人であり、その後減少傾向にあり、2022年の3人が最も少ない。一方、島外出身の生徒は2008年の10人が最も少なく、その後増加傾向にあり、2022年の74人が最も多い。以上より、国際文化交流科は、



Fig. 2 日本全国の離島留学を持つ高校の位置

年々島外の生徒が増えており、全体として増加傾向にあると言える。また、対馬島外からの留学生の出身地内訳を見ると、対馬高校の2003年の県外からの入学者は福岡県1人、山口県1人の合計2人であったが、2022年には、福岡県5人、佐賀県1人、神奈川県1人、愛知県1人、福井県1人、愛媛県1人、広島県1人、大分県1人、宮崎県1人、熊本県1人、沖縄県1人、ソウル1人の合計18人となっており、日本国内だけでなく韓国からの留学生も受け入れている。2003年から2022年の19年間の県外からの入学者は5校の中で最も増加している。その要因として実際に韓国の大学への進学実績があることや、ホームページで学校だよりを公開したり、高校の日常の活動を公開する等積極的に情報発信を行っていることが考えられる。

また、国際文化交流科に入学した理由として最も多く挙げられたのは、「早く韓国語を学びたい」の25人39.1%であった。次いで「韓国の大学に進学したい」が24人37.5%であり、国際文化交流科のカリキュラムに魅力を感じている生徒が多いことが分かった。

### 3.2.2.2 対馬高等学校の活動

国際文化交流科では、県内外の韓国語スピーチコンテストに出場し受賞している。韓国語だけでなく、韓国料理を造ったり韓服を着たり、韓国の学生と交流する等、韓国文化を体験する機会を設けている。また、韓国大学説明会では実際に韓国の大学の先生が対馬高校に来校して説明を行っている。

ユネスコスクール・科学部という部活動は、2015年に対馬高等学校がユネスコスクールに認定されたことをきっかけに、2017年に部活動として設置し、2020年にもともとあった科学部と統合し、現在ユネスコスクール・科学部として活動している。ユネスコスクール・科学部では、ツシマウラボシジミチョウの保全活動、シカの食害やチョウ個体数の調査、対馬黄金オニユリの栽培、遠隔システムを活用した他校との交流、テレビや新聞での情報発信を行っている。

## 3.2.3 五島高等学校の実態

### 3.2.3.1 五島高等学校の生徒数推移

2003年から離島留学制度としてスポーツコースを設立し、初年度の生徒数は福江島内出身が16人、島外出身が4人の合計20人であった。その後やや増減をし、2021年の65人が最大となっている（Fig.5）。出身地別に見ると、島内出身の生徒が最も多かったのは、2021年の48人であり、最も少ないのは2003年の16人である。一方、島外出身の生徒は2011年の3人が最も少なく、その後増加傾向にあり、2018年の28人が最も多い。以上より、五島高校スポーツコースは、島

内出身の生徒が2004年以降常に25人以上在学し、島外出身の生徒は増加傾向にあると言える。また、福江島外からの留学生の出身地内訳を見ると、五島高校の2003年の県外からの入学者はいなかったが、2022年に福岡県2人、大阪府1人、兵庫県1人の合計4人となっており、やや増加している。

また、スポーツコースに入学した理由として最も多く挙げられたのは、「スポーツを専門的に学びたい」の33人80.5%であった。次いで「五島の自然豊かな環境に魅力を感じた」と「地元だから」がそれぞれ2人4.9%であるが、スポーツコースのカリキュラムに魅力を感じている生徒が多いことが分かった。

### 3.2.3.2 五島高等学校の活動

スポーツコースでは、7月にはマリンスポーツ、9月と10月は乗馬実習、11月から1月はゴルフ実習を行っている。また、お濠の清掃や福江みなど祭りにボランティアとして参加している。2019年の福江みなど祭りには生徒・職員、PTA合わせて250名ほどが参加しており、高校生の若い世代が参加することで、運営の補助になるだけでなく、参加人数が増えることで地域行事の活性化にも繋がる。

また、2015年に授業の一環としてバラモンプランを導入し、五島市の地域課題や活性化について学習し、生徒自身が課題解決に向けた事業を考える時間を設けている。2018年に、この取り組みが評価され、全国ユース環境活動発表大会九州大会や若武者育成塾活動発表大会（東京）で最優秀賞を受賞した。2019年には、NPOカタリバ主催の探求学習プログラム「マイプロジェクトアワード」で発表したり、長崎県庁県議会議場にて県民表彰式に参加したり、五島市内だけでなく、県内外に向けて情報発信を行っている。バラモンプランをでは、朝の読書の時間を利用し、毎週金曜日は地域活性化問題等の新聞記事を読み、感想や意見をまとめ、「朝バラ特選集」として共有している。これらの活動を通して、地域や地域に根差す職業を知りながら、「自分の特性を活かし、地域に貢献する高校生を育てていく」、「身近な地域の課題から自分の将来を考えていく」、そして、未来において「五島に戻ってきて活躍する」「五島に戻ってこなくても五島のことを考える」生徒たちを育み、地域の発展に寄与する人材の育成を図るキャリア教育に取り組んでいる。2017年から2018年にかけては、文部科学省の「実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムに係る実践研究」の指定を受け、年次ごとに立てた取組計画にしたがって、より広い視点で地域の課題解決を担う人材育成に取り組んでいる。その結果、41人のスポーツコースに所属

する生徒へのアンケートによると、五島の魅力が分かったと回答した生徒が 23 人 56.1%，五島の課題が分かったと回答した生徒が 14 人 34.1%，五島への愛着心が湧いたと回答した生徒が 3 人 7.3%，五島に限らず地域の課題について考えたいと思うようになったと回答した生徒が 1 人 2.4%と、地域に対する意識が高まったことが分かった。

### 3.2.4 五島南高等学校の実態

#### 3.2.4.1 五島南高等学校の生徒数推移

2018 年から離島留学制度として夢トライコースを設立し、初年度は島外の生徒 6 人であったが、2019 年

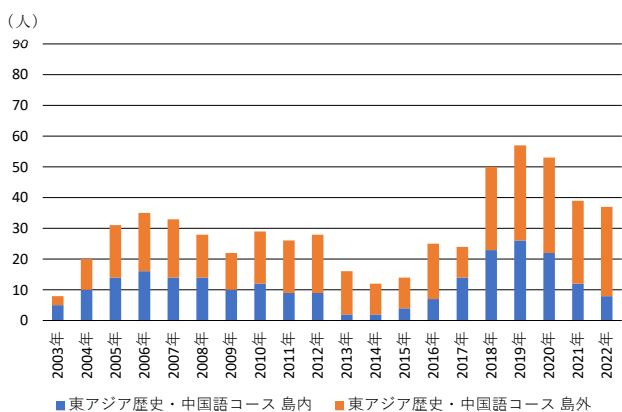


Fig. 3 杵岐高校東アジア歴史・中国語コースの生徒数推移

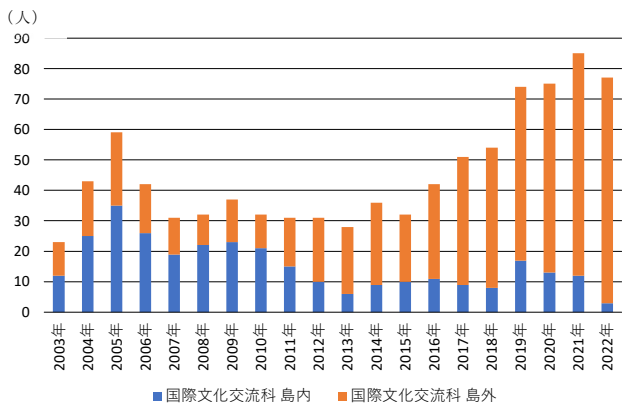


Fig. 4 対馬高校国際文化交流科の生徒数推移

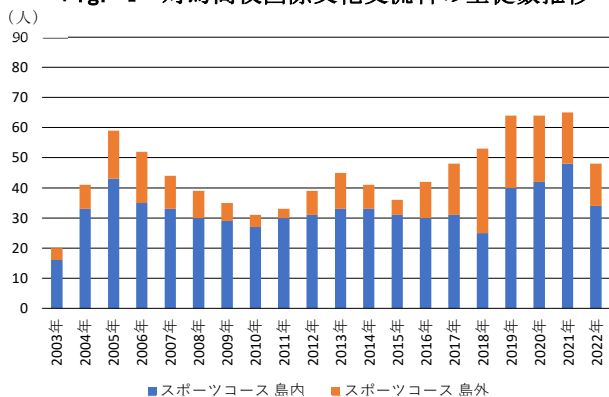


Fig. 5 五島高校スポーツコースの生徒数推移

から島内の生徒も入学し、2022 年には島内の生徒が 5 人、島外の生徒が 21 人と、一定数の入学者を確保できている (Fig.6)。また、福江島外からの留学生の出身地内訳を見ると、五島南高校の 2018 年の県外からの入学者は福岡県 1 人、佐賀県 1 人の合計 2 人であったが、2022 年に福岡県 4 人、東京都 2 人、神奈川県 1 人の合計 7 人となっており、増加している。

また、夢トライコースに入学した理由として最も多く挙げられたのは、「五島の自然豊かな環境に魅力を感じた」の 10 人 38.5%であった。次いで「少人数のクラスで学びたい」が 6 人 23.1%であり、離島ならではの環境に魅力を感じている生徒が多いことが分かった。

#### 3.2.4.2 五島南高等学校の活動

4 月に田植え体験、5 月に地域清掃、8 月に稲刈り、12 月に地域の人を講師として招いてお魚教室を開催しており、地域に根差したカリキュラムや地域住民と交流する機会が設けられている。

### 3.2.5 奈留高等学校の実態

#### 3.2.5.1 奈留高等学校の留学生数推移

2018 年から離島留学制度として英語教育に注力する E-アイランド・スクールを設立し、初年度は島外の学生 9 人であったが、2020 年には 16 人、2022 年に 22 人と増加している (Fig.7)。また、奈留島外からの留学

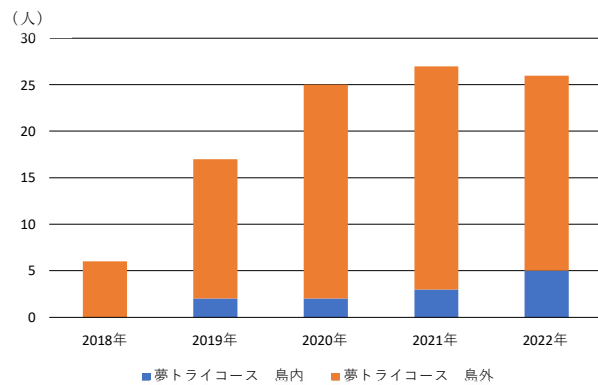


Fig. 6 五島南高校夢トライコースの生徒数推移

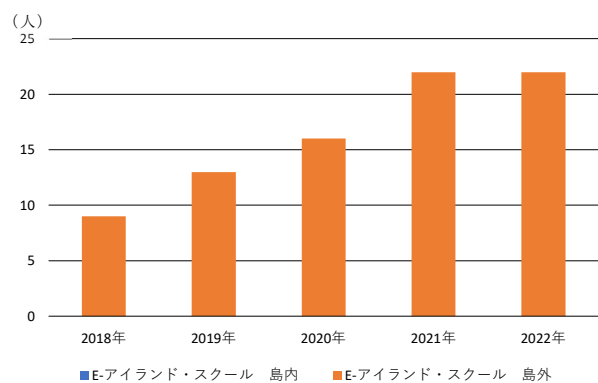


Fig. 7 奈留高校 E-アイランド・スクールの生徒数推移

生の出身地内訳を見ると、奈留高校の2018年の県外からの入学者は福岡県2人、佐賀県1人、大阪府1人、神奈川県2人の合計6人であり、2021年に福岡県4人、佐賀県1人、大阪府1人、東京都4人、鹿児島県1人の合計11人となっている。2022年に合計4人と減少しているが、2018年から2022年の5年間全体としては増加傾向にあると言える。

また、E-アイランド・スクールに入学した理由として最も多く挙げられたのは、「奈留の自然豊かな環境に魅力を感じた」の7人28.0%であった。次いで「少数のクラスで学びたい」が6人24.0%であり、離島ならではの環境に魅力を感じている人が多いことが分かった。

### 3.2.5.2 奈留高等学校の活動

奈留高校は英語教育に注力しており、1泊2日で英語を重点的に学ぶイングリッシュキャンプを実施したり、アメリカの高校と交流するグローバルクラスメイトに参加したりしている。また、水産教室や郷土料理実習は、奈留町漁協や下五島地区漁業士会に協力を得たり、地元の人を講師として招いたりして実施しており、伝統文化について学びながら、地域住民との交流できる場となっている。

また、奈留島イルミネーション設置事業や奈留島サントランの運営に、ボランティアとして参加している。高校生が地域の行事に参加することは、交流人口の増加や地域の担い手不足の改善に繋がると考えられる。

## 4 高校生の離島留学制度に対する満足度評価及び生活様式

### 4.1 満足度評価の分析

アンケートで「現在通っている高校に入学して満足していますか」という質問に対する満足度を満足、やや満足、どちらともいえない、やや不満、不満の5段階で行い、各項目と $\chi^2$ 検定を行った結果、学年、生活形態、出身地、高校が満足度と関連しており、入学理由と地域行事への参加経験の有無は満足度と関連していないことが確認された (Table2)。

学年と満足度の関連性に関して、1年生は満足が15人、やや満足が7人と満足傾向が48.9%、やや不満が4人、不満が3人と不満傾向が15.6%、2年生は満足が15人、やや満足が16人と満足傾向が59.6%、やや不満が5人、不満が5人と不満傾向が19.2%、3年生は満足が27人、やや満足が19人と満足傾向が82.1%、やや不満が2人、不満が1人と不満傾向が5.4%であり、学年が上がるにつれて満足度が高くなることが分かった (Fig.8)。

生活形態と満足度の関連性に関して、実家で生活をしている生徒は満足が28人、やや満足が14人と満足傾向が93.3%であり、やや不満や不満と回答した生徒はいなかった。一方、里親の家で生活をしている生徒は満足が15人、やや満足が14人と満足傾向が55.7%、やや不満が2人、不満が3人と不満傾向が9.6%、寮で生活をしている生徒は満足が14人、やや満足が14人と満足傾向が50%、やや不満が9人、不満が6人と不満傾向が26.8%であった (Fig.9)。里親の家で生活をしている生徒と比較して、満足及びやや満足と回答した割合の差は5.7ポイントと大差ないが、不満に感じている生徒の割合の差は17.2ポイントと寮生活の生徒の方が不満傾向にある。また、生徒の意見として寮を整備し直してほしいという意見や、留学生はなれない土地での暮らしにストレスを感じやすいため、面談の機会を増やしてほしいという意見が挙げられた。そのため、精神面でのケアや寮の整備が必要であると考えられる。

出身地と満足度の関連性に関して、島内出身の生徒は満足が28人、やや満足が14人と満足傾向が93.3%であり、やや不満や不満と回答した生徒はいなかった。九州地方出身の生徒は満足が22人、やや満足が23人と満足傾向が53.0%、やや不満が8人、不満が8人と不満傾向が18.8%、中国、四国地方出身の生徒は満足及びやや満足と回答した生徒はならず、やや不満が1人と不満傾向が100%、近畿地方出身の生徒は満足が2人、やや満足が1人と満足傾向が42.9%、やや不満が1人、不満が1人と不満傾向が28.6%、中部地方及び関東地方以北出身の生徒は満足が5人、やや満足が4人と満足傾向が60.0%、やや不満が1人と不満傾向が6.7%であった (Fig.10)。特に、やや不満や不満と回答した人は沖縄、大阪、京都、東京の比較的遠方の出身者が多く、帰省できる期間が限られていることや帰省の旅費が高いことが意見として挙げられた。

高校と満足度の関連性に関して、対馬高校でやや不満や不満と回答した生徒が多いことや、対馬高校が5校の中で最も留学生が多いことから、生徒数が多いと満足度が低くなると考えられる (Fig.11)。そのため、

Table 2  $\chi^2$ 検定結果

満足度との比較項目	p値	関連
学年	$3.85 \times 10^{-6}$	○
生活形態	$3.03 \times 10^{-5}$	○
出身地	$3.96 \times 10^{-4}$	○
高校	$3.15 \times 10^{-2}$	○
入学理由	$1.25 \times 10^{-1}$	×
地域行事への参加	$1.51 \times 10^{-1}$	×

p値が0.05以下のものを関連有とする

高校の特色だけでなく、島の特徴や生活の様子も合わせて情報発信することで満足度が上がると考えられる。

#### 4.2 高校生の生活様式

五島南高校は中心市街地から離れた場所に位置しているが、よく利用する施設は中心市街地に集中しているため、高校の位置と利用する施設の位置は関連性がない。対馬及び奈留島を見ても、主な利用施設は中心市街地から半径約5km以内にあり、行動範囲が広いとは言えない (Fig.12, Fig.13, Fig.14)。しかし、留学生も島内の生徒もよく利用する施設として同じ施設名を挙げており、大差ない生活を送っていると言える。一日のスケジュールを見ても、留学生と島内の生徒は大差ないことから、留学生も島民と同様の生活を送っていることが分かった (Fig.15)。

地域行事への参加の有無に関して、ボランティアとして参加したことがあると回答した生徒は全体の40.3%と半数以下であるが、観客または出場者として参加したことがあると回答した生徒は58.2%と半数以上であった。五島高校では、カリキュラムの一環として地域の行事にボランティアとして参加することになっているが、近年は新型コロナウイルスにより、イベントが中止になっていたため、ボランティアとして参加したことがあると回答した生徒の数が少なくなっている。しかし、観客または出場者として参加したことがある生徒は半数以上であるため、高校生の存在は地域行事の保全や活性化に一定の効果があると言える。

#### 5 まとめ

離島の廃校を防ぐ方策として実施されている離島留学制度が地域活性化のためにどのような役割を持つか長崎県の高校を対象に考察した。その結果、対馬高校、壱岐高校、五島高校は、2003年以降継続して離島留学生在がカリキュラムを支持して入学していることから、一定数の留學生を確保し続けるには、特徴的なカリキュラム等、高校の特色が必要であると考えられる。また、満足度の分析において、生活形態、出身地、学年が満足度と関連していることが分かった。島内の生徒は満足と回答した人が多いが、寮や里親生活の留學生は、やや不満や不満と回答する人も一定数いることが分かった。一方で、学年が上がるに連れて満足度が高くなることや、島内の生徒と留學生は大差ない生活を送っていることから、留學生が離島での生活に慣れるまでの精神面でのサポートも必要であると考えられる。

さらに、壱岐高校のヒューマンハートや対馬高校のユネスコスクール・科学部、五島高校のパラモンブランでは、高校生の視点で地域を盛り上げる取り組みを

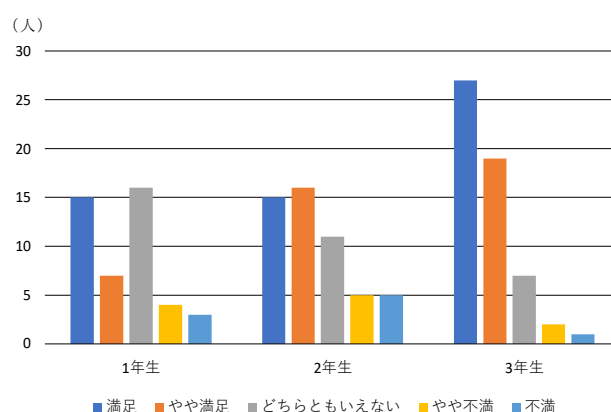


Fig. 8 学年と満足度の関連性

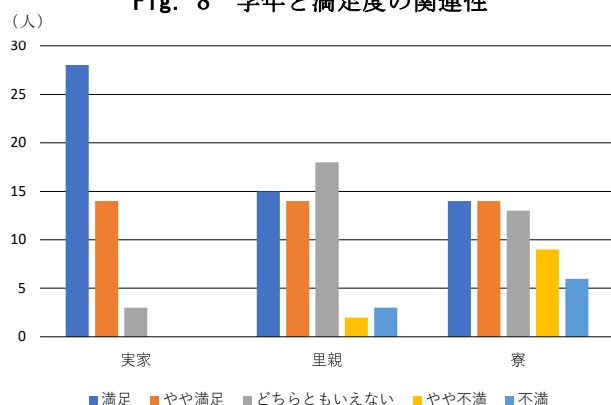


Fig. 9 生活形態と満足度の関連性

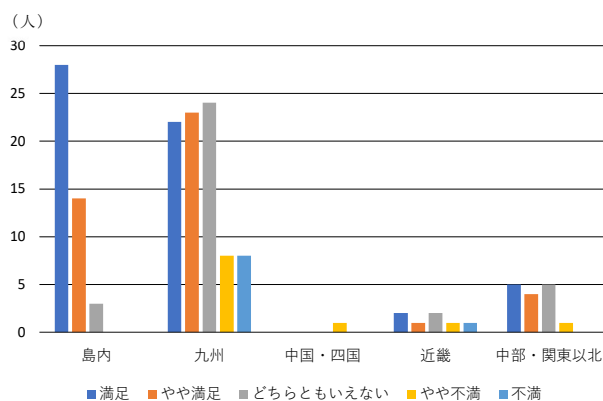


Fig. 10 出身地と満足度の関連性

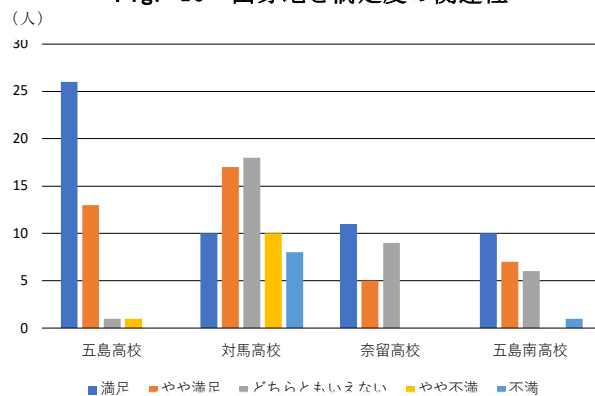


Fig. 11 高校と満足度の関連性

考えることで地域の発展に貢献したいという意識を高めることや地域住民との繋がりが生まれることが期待できる。また、パラモンプランに対するアンケートより、地域に対する意識が高まったことから、この取り組みは地域の担い手の人材育成に有効な取り組みの一つであると言える。また、地域行事への参加に関して、特に五島高校ではカリキュラムの一環として地域行事に参加するようにしていることから、高校生の存在は地域行事の保全や活性化に一定の効果があると言える。

以上より、高校生の取組が地域の課題解決や担い手不足の解消に繋がると言えるが、高校生自身が自ら積極的に地域課題に働きかけることは難しいと考えられる。そのため、部活動やカリキュラムとして地域活性化に向けた取組を組み込む等、仕掛けが必要であり、それによって高校生が有意義に働きかけると考えられる。離島地域の担い手不足の解消や地域行事の保全、活性化に向けて、高校に特色を持たせながら生徒数を確保し、高校生が地域との繋がりを持つ仕組みがあれば、地域の活性化に高校生が貢献できる可能性は十分にあると考えられる。

**謝辞：**本研究を進めるにあたって、資料提供及びアンケートにご協力頂きました長崎県教育委員会をはじめ、長崎県立杵岐高等学校、長崎県立対馬高等学校、長崎県立五島高等学校、長崎県立五島南高等学校、長崎県立奈留高等学校の皆様深く御礼申し上げます。

#### 参考文献

- 1) 長崎県立対馬高等学校 | 長崎県立対馬高等学校の公式 Web サイト(tsushima-h.jp) (2022.6.15 閲覧)
- 2) 杵岐高等学校 | 長崎県立学校ホームページ (news.ed.jp) (2022.6.15 閲覧)
- 3) 五島高等学校 | 長崎県立学校ホームページ (news.ed.jp) (2022.6.29 閲覧)
- 4) 五島南高等学校 | 長崎県立学校ホームページ (news.ed.jp) (2022.6.29 閲覧)
- 5) 奈留高等学校 | 長崎県立学校ホームページ (news.ed.jp) (2022.6.29 閲覧)
- 6) 国土政策：離島留学について - 国土交通省 (mlit.go.jp) (2022.5.18 閲覧)
- 7) 垣野義典, 伊藤俊介, 倉斗綾子「地域資源を活用した離島留学制度に関する研究－薩摩川内市立鹿島小学校のウミネコ留学制度を対象として－」日本建築学会技術報告集第26巻, 第64号, 1114-1119, 2020年10月
- 8) 「長崎県離島振興計画 平成25年5月」長崎県企画振興部

#### 注釈

注1) 社会増減=転入者数(人)－転出者数(人)

注2) 国土交通省 HP「令和3年度 離島留学募集地域一覧」より

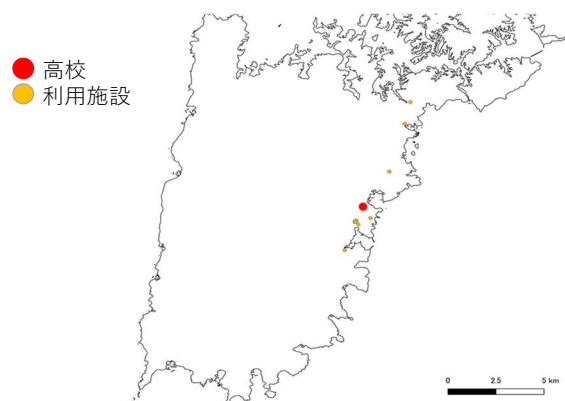


Fig. 12 対馬の高校生が利用する施設の位置

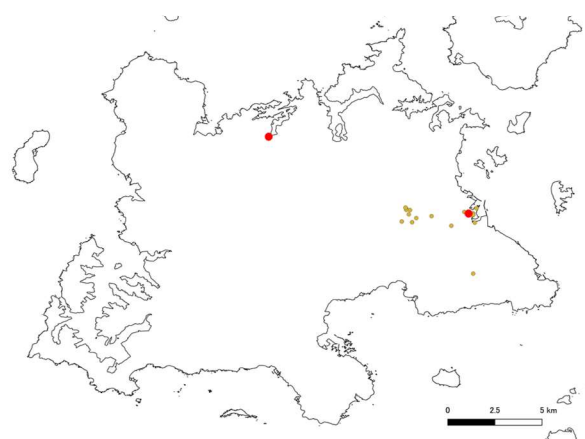


Fig. 13 五島市福江島の高校生が利用する施設の位置

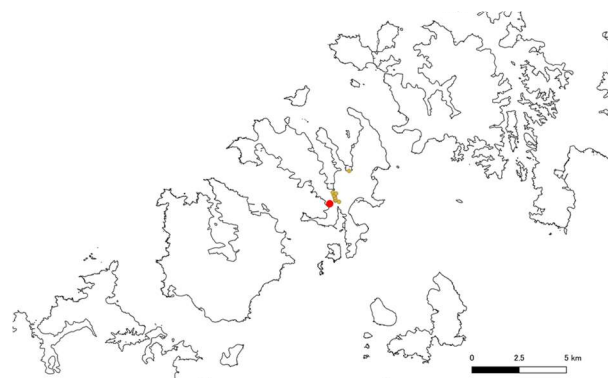


Fig. 14 五島市奈留島の高校生が利用する施設の位置

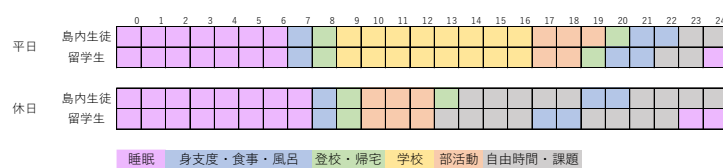


Fig. 15 島内生徒及び留学生の一日のスケジュール